
BABYRON 2 - 3

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B A B Y R O N 2 - 3

【Nコード】

N O 4 6 4 N

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

携帯ゲームと官房長官との狙撃事件に関係を感じた浅井 啓刑事。誰かが貢を事件に引き込もうとしていることに気付く――
『B A B Y R O N 2』3話目です。

3・逮捕（前書き）

やっと更新しましたね！。

3・逮捕

貢の点滴に寄り添う浅井 啓刑事の元へ、2人の警察官が現れ、
「浅井 啓刑事。貴方を逮捕します。」

ガシャン

左手首に銀色の手錠がかけられた。

「どういう事。」

「何かやったの？啓。」

啓と貢は同時にそう言った。

「ご同行を願います。」

素直に彼らと共に病室の白いドアへと向かう啓に、

「啓。」

貢は声をかけた。

「大丈夫だよ。」

グレーのスーツを着た啓は軽く振り返り、

「何かの間違いつしょ。」

ボタン

ドアは閉じられた。貢は暫くベッドの上からそこを見つめていた。

「こうでもしなければ、防衛省とも警視庁としても君を呼びだせなかったからね。」

桜田門にある警視庁 長官室で。

広いそこには、3人のスーツ姿の男性。

内閣官房長官、警視庁長官、防衛省長官。

「これは、また随分な顔ぶれで。」

髪をかき上げながら、浅井啓はこの雰囲気似合わないのんびりとした口調で口を切った。

「今日、『犯人』から犯行予告声明が届いた。」

と、広いテーブルの椅子に腰かける警視庁長官が目の中の小さなMDチップを指示した。

「犯行声明文？」

啓は目を細めた。「何ですか、それ。」

「日本改造計画らしい。」

防衛省長官が答える。「今までの事件は全て我々を攪乱させるものだったという。」

「・・・・・・・・・・」

啓が目を細める。「それで。」

「これは、最高機密だが。」

官房長官が答える。「湾岸戦争の半年ほど前、クウェートでタリバンによる人質事件が起きた。その中に粕谷現地総領官の2人の息子が含まれていた。」

「・・・・・・・・・・」

「粕谷拓未ちゃんと拓也くんという。」

「拓未と拓也。」

ぼそりと啓が呟く。「・・・・・・・・・・それで。」

「その後強行突破で救出された人の中にその少年の姿は無かった。」

「

「探そうとしなかったんですか？」

「状況的に無理だった。」

防衛省長官が言った。「だが――今回このMDを送ってきた人物は『全て』を知っている。拓未くんの事も、ZATOの事もSWAP（警視庁特別行動部隊）の事も。」

「・・・・・・・・・・」

「キーワードは『^{バベル}混乱』だと犯人は言っている。」

「『^{バベル}混乱』・・・・・・・・・・」

それは、あの日、拓末が拓也（貢）に残した言葉。

「昨夜官房長官が発砲を受けた事件の時、貢くんは携帯ゲームをしていたらしいね、『BABYRON』というH・Nを持つ相手と。」

「警視長官がそう尋ねると、」

「ええ。ちよつと昨夜の事件と繋がってる気がしたので、彼にはそのままゲームを続けさせていました。」

素直に啓は言った。

「その彼の携帯の履歴を調べると」

警視庁長官は静かに、「発信先は全て世界中のZATOからだつた。」

「!・・・」

啓の目が細まる。「その『犯人』は、どうしても貢を『事件』に巻き込みたいらしいですね。」

自分の見解を述べる。「じゃあ、昨日の事件も彼を・・・貢を巻き込むために策略されたもの?」

「そういう事になる。」

官房庁長官は答えた。

「彼の記憶は?」

防衛省長官が尋ねる。

「いや、まだです・・・ただ。」

啓は真剣な眼差しで、「『誰か』が彼を事件に引き込んでいます・・・そう、『混乱^{バベル}』させる為に。」

彼の頭の中を拓末の存在がよぎる。

2時間後、啓は貢の病室にいた。

「マンション、どれがいい?」

パンフレットを数冊、貢に見せながらいつも通りのんびりした口調で啓は尋ねた。「やっぱスプリンクラー付いてる方がいいよね!。」

「・・・何かあったの？啓。」

「別に。」

「何か隠してる？」

「別に。」

いつもの啓だった。貢は目を細め、

「俺のせい？」

「じゃないよ。」

パンフレットを置き、啓は答えた。「俺はお前の記憶が戻らないで欲しいと思ってる。」

「・・・」

俯く貢。「やっぱ俺って啓にとって迷惑な存在なのかな？」

「そんな事ないよ。」

啓は優しく否定し、彼の頭を撫でた。

「お前は今まで通りでいい。俺が守ってみせる。」

啓の中で、先刻の話から一つの『結論』が出ていた。

相手は・・・犯人は人じゃない。

『国』だ。

3・逮捕（後書き）

最近 a・n・j e l l の公式サイトにハマってるから（＝）（＝）
見つけたら声をおかけ下さい。 v

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0464n/>

BABYRON 2-3

2010年10月12日00時44分発行